

<PGI 学術講演抄録> ※無断転載を禁じます

可視化時代におけるデジタルソリューションの展開

Current image technology: how can we exploit it to the maximum in treatment plans based on digital solutions?

医療法人幸加会 スギモト歯科医院（京都府京田辺市）
院長 杉元敬弘

1997年に補綴臨床に連載された「顎関節機能障害の診断と治療方針」で寿谷先生によって発表された顎関節規格撮影から得られた画像を評価にとどまらず、治療にまで応用したことは歯科界に様々な影響を与えたことは今となっては異論のないことであろう。

当初は顎内障と鑑別診断された症例に対して、顎位の安定と復位を目的として仮想顎頭理想位 (Hypothetical Condyle ideal position H. C. I. P.) の決定を行うために発案された。その後、いろいろな局面での応用が進み私の臨床においては咬合再構成を行う際に必ず画像診断を行い顎位を決定している。

世界中の流れにおいても2017年に改正される Glossary of prosthodontic terms 9th では、今まで混迷を極め一定の基準を示すことができなかつた中心位 (CR) の定義が一つに決められること、さらには関節円板の適正な位置関係が必須でなくなつたことから画像診断の必要性はさらに高まつたと言える。

このような背景の中、今日ではCBCTを始めデジタル技術を含む歯科医療の進歩により以前では考えられなかつた治療法、例を挙げると複雑な外科処置を必要とするインプラント、歯周再生治療、矯正、天然歯と見間違えるような補綴処置またそれらを複雑に組み合わせた臨床症例も可能となつた。このような治療を可能にするためには専門医の連携が必要となり、治療開始時に終了時の予測の共有が必要になる。しかしながらその根本となる最終的な補綴治療位を早い段階で診断することは容易ではない。その理由の一つに治療初期の段階では臼歯欠損などで咬頭嵌合位が存在しないため最終的な治療位を模索することもできないことがあげられる。

そこで今回は、左右顎関節の骨関節隙を診断することにより将来の治療位の予想を治療前での口腔内の状態に左右されることなく予測し、その上下顎間関係においてインプラントの埋入位置や矯正後の歯列の予想、さらにはそれをもとにしたインプラント埋入用のガイドの作成、最終補綴の形態がバーチャル空間で確認することができ、複数の歯科医の間でブループリントを共有することができるようになった治療例を通して、診断という歯科医療の根幹部分をデジタルでなければ得られなかつた情報からより正確かつ安全な治療計画を立案することの意義について報告してみたい。